



Title	詩編研究の現状
Author(s)	山吉, 智久
Description	日本基督教学会北海道支部2023年度公開シンポジウム「モーセの律法と預言者の書と詩篇 : 旧約聖書学の最前線」. 2023年8月11日.
Citation	日本基督教学会北海道支部公開シンポジウム記録, 6, 71-87
Issue Date	2025-07-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95827
Type	conference paper
File Information	jscsh_006_71.pdf



詩編研究の現状

山吉 智久

はじめに

キリスト教正典の第一部をなしている旧約聖書は、その大部分がヘブライ語（ごく一部はアラム語）で記されている。このヘブライ語聖書は、計 39 の文書からなり、全体が大きく、「律法」（トーラー）、「預言者」（ネビーイーム）、「諸書」（ケトゥービーーム）という三つの部分に分かれる。その第三の部分である「諸書」の冒頭に置かれているのが、『詩編』である¹⁾。

ヘブライ語でテヒリーム（「賛美」の意）と呼ばれる『詩編』には、全 150 編の長短の詩歌が収められており、そこには古代イスラエルの宗教思想を構成するさまざまな要素が凝縮されている。この

1) ヘブライ語聖書は、さまざまな言語に翻訳されると同時に、全体の構成にも大きな変化がもたらされた。とりわけ、ギリシア語訳である七十人訳（セプチュアギンタ）は、全体が「律法」－「歴史」－「詩歌・知恵」－「預言」という四部構成になっている。その中で『詩編』は、「歴史」と「預言」の間に置かれた「詩歌・知恵」に含められ、『ヨブ記』の後に配されている。この七十人訳の基本的な全体の構成は、ラテン語訳であるウルガタを経て、新共同訳を含む現代語訳の構成と各文書の順序に継承されている。

また、プロテスタント教会における旧約聖書の「正典」は、ヘブライ語聖書に収録された 39 文書に限定されるのに対し、カトリック教会では、ラテン語のウルガタに含まれる文書が「正典」とされるため、旧約聖書にはヘブライ語聖書 39 文書に加えて、『トビト記』、『ユディト記』、『エステル記付加』、『マカバイ記Ⅰ・Ⅱ』、『知恵の書』、『シラ書』、『バルク書』、『エレミヤの手紙』、『ダニエル書補遺』が「第二正典」として認められている（ウルガタの補遺にある『マナセの祈り』、『エズラ記Ⅲ・Ⅳ』は、「外典」〔アポクリファ、Apocrypha〕とされ、七十人訳にのみ収録されている文書は「偽典」〔Pseudepigrapha〕とされる）。

『詩編』が古くから「諸書」の中でも突出した文書の一つと見なされていたことは、新約聖書の『ルカによる福音書』24章44節において、「モーセの律法」、「預言者の書」と並んで『詩編』が挙げられていることや、『詩編』に収められた言葉が新約聖書に数多く引用されていることから伺い知れる。

生涯を通じて『詩編』についての講義や講解を繰り返し行ったドイツの宗教改革者マルティン・ルター（1483–1546年）は、『詩編』を「小聖書」（Die „kleine Biblia“）と呼び、「そこには、聖書全体にあるように、すべてが最も美しく簡潔にまとめられており、優れた便覧ないし手引きとなって設えられている」と述べた²⁾。スイスの宗教改革者ジャン・カルヴァン（1509–1564年）も、彼の『詩編注解』（1557年）の序の中で、『詩編』を「魂のすべての部分を切り分けたもの」と呼び、「誰かしらが自らの内に抱くあらゆる感情が、この鏡に映し出されている」としている³⁾。

『詩編』はまた、キリスト教において実践的な役割を果たしてきた。キリスト教の典礼・礼拝の中で、ある定められた詩編が朗読される伝統は、現在に至るまで受け継がれている。この『詩編』という文書をめぐって、これまでにどのような研究が繰り返されてきているのか。本稿は、『詩編』をめぐる20世紀以降の旧約聖書学界の潮流をごく簡単にたどりつつ、比較的最近の詩編研究において注目されている視点とその成果の一端を紹介する⁴⁾。

²⁾ M. Luther, Zweite Vorrede auf den Psalter (1528), in: H. Bornkamm (Hg.), *Luthers Vorreden zur Bibel*, Frankfurt a.M. 65.

³⁾ E. Busch u.a. (Hg.), *Calvin-Studienausgabe, Bd. 6: Der Psalmenkommentar. Eine Auswahl*, Neukirchen-Vluyn 2008, 21

⁴⁾ 日本語での『詩編』研究史の紹介として、古くは、左近淑「詩篇および文学的小品」、石田友雄／西村俊昭／木田献一／野本真也／左近淑『総説 旧約聖書』日本基督教団出版局、1984年 442-477頁、石川立「詩編の様式と編集」、木幡藤子／青野太潮 編『現代聖書講座 第2巻 聖書学の方法と諸問題』日本基督教団出版局、1996年、140-163頁など、「比較的」最近では、飯謙『旧約詩編の文献学的研究——第1ダビデ詩編を中心として』新教出版

I.

20 世紀前半以降、『詩編』についての一連の研究を、いわば「王道」として何十年にもわたって支配してきているのが、ヘルマン・グンケル（1862–1932 年）によって提唱された様式批評（Formkritik）ないし類型批評（Gattungskritik）と呼ばれるものである。グンケルによる研究成果は、『詩編』注解ならびに『詩編』の体系的な入門書（彼の死後に、弟子の一人であったヨアヒム・ベグリヒ [1900–1945 年] によって完成された）にまとめられた⁵⁾。『詩編』は、旧約聖書の他の文書とは異なり、150 の章からなる一つながりの文書ではなく、150 の独立した個別の詩編の集成になっている、いわゆる詩歌集である。様式・類型批評が注目するのは、『詩編』に収録されている個々の詩編である。それらの各作品には、共通する表現、成句、思想が見られることがあり、そのような共通性は、集団社会の日常生活と口頭伝承に深く根差したものであると考えられた。そこで、(a) 特徴的・典型的な言語・形式、(b) 特定のモチーフ・主題、そして (c) 共同生活における特定の固定された状況である「生活の座」(Sitz im Leben) という三つの特性が一致するものによって、ある一つの類型 (Gattung) が形成されるというのである。グンケルによれば、『詩編』に登場する最も重要な類型は以下の四つである。

1. 「賛美」：神へのほめたたえ（33、100、113、148 編など）

社、2006 年、2-72 頁、同「詩編」、池田裕／大島力／樋口進／山我哲雄 監修『新版 総説 旧約聖書』日本基督教団出版局、2007 年、421-437 頁など参照。

⁵⁾ H. Gunkel, *Die Psalmen, übersetzt und erklärt* (Göttinger Handkommentar zum Alten Testament Bd. II/2), Göttingen 1926; ders., *Einleitung in die Psalmen. Die Gattungen der religiösen Lyrik Israels*, Zu Ende geführt von J. Begrich, Göttingen 1933.

2. 「個人の嘆きの歌」：苦難の中での個人による神への祈り訴え（13、22、130 編など）
3. 「民の嘆きの歌」：苦難の中での集団による神への祈り訴え（44、60、74、80 編など）
4. 「感謝の歌」：苦難からの救助に対する神への感謝（30、32 編など）

これらの他に、「王の詩編」（2、18、72、110 編など）、「巡礼」（84、122 編など）、「知恵や教訓の詩編」（37、49、73 編など）、イスラエルの民がたどった「歴史」（78 編など）などの小さな類型もあるとされた⁹⁾。

詩編の類型は、各詩編が公的ないし私的な礼拝内のある特定の機会を繰り返し用いられた結果として生じたものであるということを前提にしており、グンケルにとって詩編の類型を規定するそのような共通の機会、いわゆる「生活の座」として想定されるのは、古代イスラエルの礼拝であった。この「生活の座」の探求の中でも、ノルウェーの聖書学者シグムント・モーヴィンケル（1884—1965 年）が特に着目したのは、グンケルが想定した小類型の一つである「即位の歌」（93、97、99 編など）であった。イスラエルの神ヤハウェが王として君臨することをたたえるこれらの詩編について、モーヴィンケルはバビロニアの新年祭（アキトゥ祭）を念頭に、古代イス

⁹⁾ このような区分に対し、クラウス・ヴェスターマン（1909-2000 年）は、「賛歌」と「感謝」の上位概念に「讃え」（Lob）という類型を想定し、類型を大きく「讃え」と「嘆き」（Klage）の二つに区分しようとしている（C. Westermann, *Das Loben Gottes in den Psalmen*, Göttingen 1968⁴⁾）。また、類型の単純な詩編は古い伝承要素、類型の複雑な詩編は後期の作品という前提の下、古く単純な形式が変化して次第に複合されていく類型の歴史的推移を見定めようとするフランク・クリューゼマン（1938 年—）の試みも生まれた（F. Crüsemann, *Studien zur Formgeschichte von Hymnus und Danklied in Israel* (WMANT 32), Neukirchen-Vluyn 1969)。

ラエルにも秋の祝祭日にヤハウエの即位式を想定する。そして『詩編』に収録されている詩編の多くはこの祭儀の折に、エルサレム神殿の詠い手によって編まれたものであり、それ以外を起源とするものはごく稀な例外であると考えたのである⁷⁾。

各々の詩編と祭儀との関連を想定し、その背後に何らかの儀式や制度を見定めようとする方向性は、アルトゥール・ヴァイザー（1893–1978 年）⁸⁾やハンス・ヨアヒム・クラウス（1918–2000 年）⁹⁾などに引き継がれ、彼らの『詩編』注解の中では、多くの詩編の背景に「契約更新祭」や「王のシオン祭」などが推測された。この見解に立つと、『詩編』は神殿祭儀の際、実際に用いられた賛美歌集に他ならないものであった。

様式・類型批評は、各詩編の詩的構造の分析に多大な貢献を果たしてきたが、それと同時に、この方法論が持つ以下のような問題も指摘されてきた。

第一に、「生活の座」として想定・再構成される祭儀や制度はきわめて仮説的な性質を帯びており、それらが実在したことの具体的な証言に乏しい。この問題はグンケル自身によって既に認識されており、彼は『詩編』に収録されている大半の詩編について、それらは元来の祭儀的な「生活の座」から既に解消され、精神化された詩作になっていると述べている¹⁰⁾。

第二に、『詩編』に収録されている詩編の中には、ある一つのはっきりとした類型に区分できない詩編も少なくなく、混合体や中間体も存在する。このような類型の混合や拡張といった事態を想定することは、そもそも各詩編を類型に区分することの意味の減退につ

⁷⁾ S. Mowinkel, *Psalmstudien I–VI*, Kristiania 1921–1924.

⁸⁾ A. Weiser, *Die Psalmen*, 2Bde. (ATD 14–15), Göttingen 1963 [A. ヴァイザー『ATD 旧約聖書註解 12–14 詩篇〈上〉〈中〉〈下〉』安達忠夫／塩谷鏡／大友陽子訳、ATD・NTD 聖書註解刊行会、1983–1987 年]。

⁹⁾ H.-J. Kraus, *Psalmen*, 2Bde (BK XV/1–2), Neukirchen-Vluyn 1966.

¹⁰⁾ Gunkel, *Einleitung*, 12.

ながる。

様式・類型批評が抱えるこのような課題を前にして、例えば先の「即位の歌」について、その「生活の座」としての即位祭を仮説的に再構成するよりも、この詩編から古代イスラエルにおけるエルサレム神殿の神学的な伝統や、イスラエルの神がここで全地の王として即位するという観念を古代オリエントや他の旧約聖書テキストを背景として読み取ろうとする試みの方が、より実り多きことと見なされるようになってきている。これを主に図像学的な視点から展開したのがオトマール・ケール（1937 年－）であった¹¹⁾。彼の手法も取り入れつつ、各詩編を構成するさまざまな表現の背後に、文化的・伝統的な影響を探ろうとする伝統史的・モチーフ史的考察を牽引してきているのがベルント・ヤノフスキ（1943 年－）である¹²⁾。彼らの同僚・教え子たちによって、これらの方法論に則った数多くの充実した業績が生み出されている¹³⁾。そこでは、詩編を構成している各モチーフ（語ないし成句）を、旧約聖書を生み出した古代イスラエルの伝統、更には古代西アジア宗教史の中に位置付けることにより、それぞれのモチーフが持つ宗教思想史的な特質を明らかに

¹¹⁾ O. Keel, *Die Welt der altorientalischen Bildsymbolik und das Alte Testament. Am Beispiel der Psalmen*, Göttingen 1996⁵ [O. ケール『旧約聖書の象徴世界——古代オリエントの美術と「詩編」』山我哲雄訳、教文館、2010 年]。

¹²⁾ B. Janowski, *Konfliktgespräche mit Gott. Eine Anthropologie der Psalmen*, Göttingen 2021⁶。

¹³⁾ F. Hartenstein / B. Janowski, *Psalmen* (BK XV), Neukirchen-Vlyun / Göttingen 2012ff; P. Riede, *Im Netz des Jägers. Studien zur Feindmetaphorik der Individualpsalmen* (WMANT 85), Neukirchen-Vlyun 2000; A. Grund, *Die Himmel erzählen die Herrlichkeit Gottes. Psalm 19 im Kontext der frühjüdischen Toraweisheit* (WMANT 103), Neukirchen-Vlyun 2004; K. Liess, *Der Weg des Lebens. Psalm 16 und das Lebens- und Todesverständnis der Individualpsalmen* (FAT II/5), Tübingen 2004; A. Krüger, *Das Lob des Schöpfers. Studien zur Sprache, Motivik und Theologie von Psalm 104* (WMANT 124), Neukirchen-Vlyun 2009; M. Lichtenstein, *Von der Mitte der Gottesstadt bis ans Ende der Welt. Psalm 46 und die Kosmologie der Zionstradition* (WMANT 139), Neukirchen-Vlyun 2014 など。

する。そして個々のモチーフがどのように有機的に結合されて一つの詩編を形成しているのかが解明されるのである。この研究方法の特色は、詩編を『詩編』という一つの文書内だけで取り扱うのではなく、旧約聖書全体の中に位置付けること、またユダヤ・キリスト教の枠組みにとどまらず、広く古代西アジアの文脈の中で捉えようとする点にある。

各詩編を類型に分類することは今なお詩編研究の出発点となっており、『詩編』に収録されている 150 の個々の詩編を、それ自体完結した、詩的・神学的な意味のまとまりであり、個々の成立史を探究することが釈義の基盤となるべきことに疑いの余地はない。それと同時に、仮構的な祭儀を前提とした様式・類型批評の方法論的な限界は、詩編を伝統史的、宗教史的な枠組みの中で捉えようとする試みによって補われるようになってきているのである。

II.

20 世紀半ば以降の詩編研究がもつばら、『詩編』に収録された個別の詩編に着目してきたのに対し、現在ではそれだけに留まらず、ある一つの文書としての『詩編』が視野に入れられ、それによって個々の詩編についての研究は補われるべきであり、そうされねばならないと見なされるようになってきている。

この新しい傾向は、詩編釈義と『詩編』釈義 (Psalmenexegese und Psalterexegese) というキーワードによって特徴付けられ¹⁴⁾、主にドイツのカトリック司祭兼神学者エーリッヒ・ツェンガー (1939–2010 年) によって牽引されてきた。ツェンガーと共に、同じくドイツのカトリック司祭兼神学者フランク・ローター・ホスフ

¹⁴⁾ E. Zenger, *Psalmenexegese und Psalterexegese. Eine Forschungsskizze*, in: ders., (Hg.), *The Composition of the Book of Psalms*, Leuven 2010, 24. また、K. Seybold / E. Zenger (Hg.), *Neue Wege der Psalmenforschung* (HBS 1), Herder 1994 なども参照。

エルト（1942–2015 年）もまた、ツェンガーとの共著で『詩編』注解書¹⁵⁾や数多くの論文¹⁶⁾を著し、新たな『詩編』研究の可能性を精力的に示してきた。その影響を受けて、最近の研究では、個々の詩編または詩編グループを、現在の文学的な文脈の中で解釈するものが非常に増えてきている¹⁷⁾。

この研究方法の背景には、『詩編』を構成している一つ一つの詩編は異なる作者によってさまざまな関心をもって創作されたものではあるが、それら各詩編の収集と配列が無秩序に行われたのではなく、ある何らかの意図によって行われたとの想定がある。

個々の詩編をより大きな文脈の中で見るべき指標は、現在の形の『詩編』自体に見て取ることができる。41、72、89、106 編の各詩編の末尾部分には、「主をたたえよ」という賛美を表す「*頌栄*」

（Doxologie）が置かれており、更に 72 編の末尾には「エッサイの子ダビデの祈りの終わり」という「奥付」（Kolophon）がある。これによって、現在の一つの文書としての『詩編』は、1–41 編、42–72 編、73–89 編、90–106 編、107–150 編という五つの部分に大きく分かれているのである。

今の形の『詩編』が一時に生み出されたのではなく、いくつかの小詩集がまず形成され、それらが更なる編集によって一書物としての『詩編』に至ったと考えられるもう一つの指標が、個々の詩編のほぼすべての冒頭に置かれているいわゆる表題（Überschrift）である。

これらの要素は、様式・類型批評を主軸とする詩編研究において

¹⁵⁾ F-L. Hossfeld / E. Zenger, *Die Psalmen I. Psalm 1–50* (NEB 29), Würzburg 1993; *Die Psalmen II. Psalm 51–100* (NEB 40), Würzburg 2002; *Die Psalmen III. Psalm 101–150* (NEB 41), Würzburg 2012; *Psalmen 51–100* (HThKAT), Freiburg 2000³; *Psalmen 101–150* (HThKAT), Freiburg 2008.

¹⁶⁾ F-L. Hossfeld / E. Zenger, „*Neigt euer Ohr den Worten meines Mundes*“ (Ps 78,1). *Studien zu Psalmen und Psalter*, Stuttgart 2015 など。

¹⁷⁾ Zenger, *Psalterexegese*, 24f, Anm. 19 参照。

は伝統的に、後代になって二次的に付加された単なる編集上の産物として処理され、顧みられることが少なかった。しかしながら、聖書を現在のわれわれの手元にある形でどのように解釈するかということに重点を置いた「正典的解釈」(Canonical criticism)の興隆と共に、これらの要素も重要な意味を持つことが認められるようになってきている。

各詩編に置かれている表題を手がかりとして見ると、『詩編』の中にはいくつかの小さなグループがあることが分かる。3-41 編の「ダビデの歌」、42-49 編の「コラの歌」、73-83 編の「アサフの歌」などである。また、42-83 編は、神を呼び表す際に神聖四文字の YHWH「ヤハウェ」ではなく、一般名詞の「エロヒーム」が用いられている割合が多いことから、「エロヒーム詩編」と呼び慣わされている。こうした小グループは、現在の『詩編』の五つの部分への区分に先立って形成されていたものであると考えられ、『詩編』にある 150 の詩編が、ある一時にまとめられたのではなく、時間をかけて徐々に形成されていったことが示唆されている。

隣接・近接する詩編の間には更に、意味論的、構造的そして様式的に、明らかな関連を見て取ることができる。それらは、共通の鍵語やモチーフによる意図的な「つながり」(concatenatio)、特定の主題による詩編の計画的な「並置ないし隣接・近接」(iuxtapositio)によって導き出すことができる¹⁸⁾。このようにして、近接する個々の詩編間の関係を記述すること、この関係から生じる意味の追加の文脈を把握することの両方が試みられている¹⁹⁾。

比較的最近の研究は、現在の『詩編』の各詩編の配列を顧慮しつつ、個々の詩編における重要な鍵語や表現の連関を手がかりに、

¹⁸⁾ Zenger, *Psalterexegese*, 27.31 参照。

¹⁹⁾ 但し、これらの連結が意図的なものなのか、あるいは偶然の産物なのかという問題は、常に認識しておく必要がある。Liess, *Weg des Lebens*, 405, Anm. 12 参照。

『詩編』が今ある姿へと編集された過程を再構成し、そこにはたらいた神学的な関心を明らかにしようとするものである。

この研究方法では、『詩編』を構成している個々の詩編は異なる作者によって創作されたが、それらの収集と配列は無秩序、無作為に行われたのではなく、各詩編をより大きな文脈の中に位置付けた編集者（たち）による意図が反映されたものであると想定される。この想定の下、『詩編』という文書は、最初から最後までが首尾一貫したテキストとして読むことができるのである²⁰⁾。

III.

最近の詩編研究によって得られる知見の一例として、『詩編』72編を見てみよう。この詩編は、神の義の仲介者としての王を主題としており、類型としては、いわゆる「王の詩編」に属する。この詩編は、「ソロモンの」（リシュロモー）という表題（Überschrift）に続いて、王（の子）に「公正」（ミシュパート）と「正義」（ツェダーカー）が授与されるようにという神に対する祈りの言葉で始まり（1 節）、18-19 節の頌栄（Doxologie）ならびに 20 節の奥付（Kolophon）で終わる。

この『詩編』72 編の全体的な構成は、以下のような形にまとめることができる。

1 節	表題：「ソロモンの／に」
A 2-4 節	社会的権威としての王（裁く／救う）
B 5-7 節	自然における祝福
C 8-11 節	全世界に及ぶ王の支配
A' 12-14 節	社会的権威としての王（救う／贖う）

²⁰⁾ F.-L. Hossfeld / E. Zenger, NEB 29, 5 参照。

B' 15-17 節 自然における祝福

18-19 節 頌栄：「主なる神をたたえよ」

20 節 奥付：「エッサイの子ダビデの祈りの終わり」

表題と頌栄・奥付に挟まれた 2-17 節で展開される祈願と約束は、以下の五つの段落に分けることができる。

段落 A (2-4 節) + B (5-7 節) と A' (12-14 節) + B' (15-17 節) はペアを形成し、王の統治を 2 つの側面から説明する。王は社会的権威として、致命的な暴力と脅威から虐げられた弱者を「裁き、救う」(2-4 節 // 12-14 節)。それと同時に、王は自然界における神の祝福の仲介者である (5-7 節 // 15-17 節)。それらに挟まれた中核の段落 C (8-11 節) は、全地へと広がる王の普遍的な支配について語る。

この詩編は、「王の詩編」として、王の儀式で歌われたものと見られ、その背後に王の即位式や季節祭などが想定されてきた。しかしながら、それらの儀礼的な詳細は明らかではなく、そもそもこの詩編が成立した時期についてもはっきりしない。

72 編を、現在の『詩編』におけるより広い文脈で見るとどうなるだろうか。この詩編は、最終節の 20 節に「エッサイの子ダビデの祈りの終わり」という奥付が置かれている。この奥付はいくつかの示唆を与える。第一に、ダビデに帰される詩編は、72 編以降にもいくつかある (86、101、103、108-110、124、138-145 編)。このことから、『詩編』には複雑な編集過程が想定される。72 編の末尾に奥付を付した編纂者(たち)は、「ダビデの」という表題を持つ詩編が更に続くことを(まだ)知らなかったということになるのである。

第二に、この奥付に反して、この詩編そのものは、1 節の表題によると、ダビデ自身ではなく、その息子であるソロモンに帰され

ている（この場合のラメドは、Lamed inscriptionis と解される）²¹⁾。ところが、この「ソロモンの」（リシュロモー）という表現は、「ソロモンに／のために」とも解し得る（この場合のラメドは、Lamed dativum と解される）。本詩の末尾に付されている奥付は、後者の意味での理解を促す。すなわち、ここではダビデがその子ソロモンのために祈った歌として読まれることになるのである。

これに先立って、3-41 編と 51-70 編という二つの大きな「ダビデの歌」のまとまりが置かれている。そして 72 編に前置きされている 71 編は表題を欠くが、これは年老いゆく者の祈りの歌になっている（9.18 節など参照）。「ダビデの歌」のいくつかには、歌われた状況をより詳しく述べているものもある。例えば 59 編は、「サウルがダビデを殺そうと、人を遣わして家を見張らせたとき」とあり、これは『サムエル記上』19 章の物語を想起させる。『詩編』の前半部分には、『サムエル記上・下』から『列王記上』にかけて記されているダビデの生涯を念頭に、その生涯の過程で歌われたものとして理解させようとする意図が垣間見えるのである²²⁾。

この視点で 72 編の表題・奥付を見ると、これは単なる集成のしるしにとどまらない。『列王記上』1-2 章に描かれた晩年のダビデの姿を背景に、71 編は、年老いたダビデによる自らのための祈りとして、続く 72 編は、ダビデが自分に代わって即位した息子ソロモンのために祈ったものとして読むように促されるのである。それは、王としてあるべき理想的な姿を示しつつ、我が子がそのような人物となるように、との祈願である。

おわりに

²¹⁾ E. Jenni, *Die hebräischen Präpositionen*. Band 3: *Die Präposition Lamed*, Stuttgart 1992, 71 参照。

²²⁾ 冒頭の表題によって、ダビデの生涯のある局面に位置付けられている詩編として、18、34、51、52、54、56、57、59、60、63 編がある。

詩編研究において、ある一つの詩編がそれ単独で取り扱われる場合、これまではその詩編が持つ特徴を把握することに集中し、現在の『詩編』の文脈を超えた別の詩編との共通性が前面に押し出されてきた。最近ではそれだけにとどまらず、『詩編』という文書そのものが、個々の詩編の最初の解釈者の一人であるという前提の下、その詩編が『詩編』の中に置かれている文脈から、それが既に古代においてどう読まれ、どう解釈されていったのかということも考慮されるようになってきている。

付録 1 : 『詩編』 の構成

1-41 1-2 3-41	第一の書 序：トローラー／メシア ダビデの歌（1） 3-14, 15-24, 25-34, 35-41 ダビデ 頌栄：「主をたたえよ、イスラエルの神を。世々とこしえに。」 アーメン、アーメン」（41:14）
42-72 42-49 50 51-72	第二の書 コラの歌 アサフの歌 ダビデの歌（2） ダビデ 頌栄：「主なる神をたたえよ、イスラエルの神、ただひとり驚くべき御業を行う方を。栄光に輝く御名をとこしえにたたえよ、栄光は全地を満たす。アーメン、アーメン」（72:18-19） 典付：「エッサイの子ダビデの祈りの終わり」（72:20）
73-89 73-83 84-85 86 87-88 89	第三の書 アサフの歌 コラの歌 ダビデの歌 コラの歌 王の詩編 ダビデ 頌栄：「主をたたえよ、とこしえに。」 アーメン、アーメン」（89:53）
90-106 90-92 93-100 101-103 104-106	第四の書 ヤハウエー王の詩編 ダビデの歌（3） ハレルヤ（たたえの歌） ダビデ 頌栄：「イスラエルの神、主をたたえよ。世々とこしえに。民は皆、アーメンと答えよ。ハレルヤ。」（106:48）
107-150 107 108-110 111-118 119 120-134 135-136 137 138-145 146-150	第五の書 ダビデの歌（4） ハレルヤ（たたえの歌） トローラー 都上りの歌 ダビデの歌（5） ダビデ 頌栄：「わたしの口は主を賛美します。すべて肉なるものは、世々限りなく聖なる御名をたたえます」（145:21） ハレルヤ（たたえの歌）

付録 2 : 2017 年以降刊行の主な詩編研究

注解書

- F. Hartenstein / B. Janowski, *Psalmen 3-6* (BK XV/1, Lieferung 3-4), Göttingen 2018
– / –, *Psalmen 9-10* (BK XV/1, Lieferung 5), Göttingen 2023
D. Böhler, *Psalmen 1–50* (HThKAT), Freiburg 2021
H. Spieckermann, *Psalmen. Band 1: Psalm 1–49* (ATD 14), Göttingen 2023

論文集

- F.-L. Hossfeld u.a. (Hg.), *Trägerkreise in den Psalmen* (BBB 178), Göttingen 2017
K. Liess / J. Schnocks (Hg.), *Gegner im Gebet. Studien zu Feindschaft und Entfeindung im Buch der Psalmen* (HBS 91), Freiburg 2018
U. Berges u.a. (Hg.), *Zur Theologie des Psalters und der Psalmen. Beiträge in memoriam Frank-Lothar Hossfeld* (BBB 189), Göttingen 2019
F. Hartenstein / T. Willi (Hg.), *Psalmen und Chronik* (FAT II/107), Tübingen 2019
C. Frevel (Hg.), *"Mit meinem Gott überspringe ich eine Mauer"/"By my God I can leap over a wall." Interreligiöse Horizonte in den Psalmen und Psalmestudien/Interreligious Horizons in Psalms and Psalms Studies* (HBS 96), Freiburg 2020
A. Brodersen u.a. (Hg.), *Intertextualität und die Entstehung des Psalters. Methodische Reflexionen – Theologiegeschichtliche Perspektiven* (FAT II/114), Tübingen 2020
G. Barbiero / M. Pavan / J. Schnocks (Hg.), *The Formation of the Hebrew Psalter. The Book of Psalms Between Ancient Versions, Material Transmission and Canonical Exegesis* (FAT 151), Tübingen 2021

個別研究書

- J. Krawelitzki, *Gottes Macht im Psalter* (FAT II/97), Tübingen 2017
- S. Eder, *Identifikationspotenziale in den Psalmen. Emotion, Metaphern und Textdynamik in den Psalmen 30, 64, 90 und 147* (BBB 183), Göttingen 2017
- A.-C. Fiß, *Lobe den Herrn, meine Seele! Psalm 103 in seinen Kontexten* (WMANT 156), Göttingen 2018
- J. P. Agbagnon, „Und die Nacht wird leuchten wie der Tag.“ *Weltbild, Gottesbeziehung und Bewusstsein des Beters in Psalm 139* (HBS 92), Freiburg 2019
- C. Neuber, *Affirmation und Anfechtung. Untersuchungen zu den Reden der Gegner in den Psalmen* (HBS 93), Freiburg 2019
- S. Riegert, *Die „Ich-Sphäre“ des Beters. Eine anthropologische Untersuchung zur Selbstreflexion des Beters am Beispiel von Ps 42/43* (FRLANT 275), Göttingen 2019
- M. Krusche, *Göttliches und irdisches Königtum in den Psalmen* (FAT II/109), Tübingen 2019
- K. Kremser, *Die Hochzeit des Königs. Exegetisch-theologische Untersuchungen zu Psalm 45* (ÖBS 51), Berlin 2019
- N. Rahn, *"Ein Königtum aller fernsten Zeiten." Studien zu Text und Kontexten von Ps 145 und seiner Bedeutung für die Rezeptionsgeschichte des "Reiches Gottes"* (HBS 94), Freiburg 2020
- K. Gies, *Strebe nach Schalom!. Eine biblisch-ethische Lektüre von Psalm 34* (WMANT 156), Göttingen 2021
- P. Riede, *Zwischen Mensch und Gott. Psalm 45 und die Bedeutung von König und Königin im Rahmen der judäischen Herrschaftstheologie* (WMANT 156), Göttingen 2022
- E. Rodrigues, *Psalm of Praise for the Rescue of the Troat. Concatenation*

- and lectio continua of Pss 33–34–35* (ÖBS 54), Berlin 2022
- P. Jenkins, *He Will Save You from the Deadly Pestilence. The Many Lives of Psalm 91*, Oxford 2023
- J. Gärtner, *Das ägyptische Hallel. Eine Untersuchung zu Theologie und Komposition der Psalmen 113-118* (BThSt 193), Göttingen 2023
- D. C. Ray, *Conflict and Enmity in the Asaph Psalms* (FAT II/145), Tübingen 2023
- C. Levin / R. Müller, *Die Psalmen in ihrer Urgestalt*, München 2024
- B. Weber, „*Neigt euer Ohr zu den Worten meines Mundes!*“ (Ps 78,1). *Studien zu den Asaph-Psalmen* (ÖBS 57), Berlin 2024
- , „*Der HERR ist mein Licht und meine Rettung ...*“ (Ps 27,1). *Studien zu Psalmen und Psalter* (ÖBS 58), Berlin 2024

文献表

- B. Weber, Bibliographie zu Psalmen und Psalter. Samt Wirkungsgeschichte und Anwendung (ab 1990) Status: 15.XII.2024 (update 88) / Bibliography of Psalms and the Psalter. In Conjunction with the History of Interpretation and Application of Psalms (since 1990), / Stand 15.XII.2024 (update 88)
- <https://bienenberg.academia.edu/BeatWeber> (2024 年 12 月 31 日アクセス)